



子ども樹木博士 ニュース

2015 - 12

No. 61

子ども樹木博士認定活動推進協議会

巻頭言

樹木とはどういうものか



元森林総合研究所 森林環境部長 藤森 隆郎

「樹木博士」というからには、「樹木」とはどのようなものを簡単にでも話せることが必要です。そのためには樹木の特徴を「草」との違いで説明するのが分かりやすいと思います。その最大の違いは樹木の幹と草の茎の違いにあります。幹は水平方向にも年々細胞が増えていって太りますが、茎は太りません。草でも春よりも夏に茎が少し太ってはいても、それは細胞が膨らんで太くなっているだけです。

小学生ぐらいまではその位の知識でよいでしょうが、中学生になれば、できれば「形成層」という薄い膜状の組織が樹皮の内側にあって、そこで細胞分裂が起きて幹が太っていくのだということは知っておくといよいでしょう。樹木は内側から外に押し出されるように太っていくのではなく、外側が太っていくのだということを、木の切り株の年輪で説明すると分かりやすいでしょう。

さらに大人になるにつれて、では木は無限に太っていけるものなのか、樹木の寿命はあるのかなどという疑問に答えていくことが必要でしょう。樹木の寿命は遺伝的なものと環境によって決まってきますが、アメリカ中西部のブリストレコンマツは4,800年以上と

記録されています。太さでは、やはりアメリカのシエラネバダ山脈のギガント・セコイアで、直径が9m以上です。樹高もやはりカリフォルニア州北部の太平洋沿岸のセンペルセコイアで、110m以上が記録されています。

上記の3種は、遺伝的に寿命が長いということが基本条件としてありますが、環境も大きく影響しています。ブリストレコンマツの生育地は標高が高く気温の高低差が大きく、乾燥していて風も強いという厳しい環境のところですが、したがってブリストレコンマツは低くてズングリとしているために、強風による根返りが起きにくく、また乾燥気候が腐朽菌の繁殖を抑えています。センペルセコイアは寒暖の差が極めて少なく温暖で水分条件もよい恵まれた環境で育つので樹高が100mを超す高木に育ちます。しかし高くなりすぎると地下部は地上部を支えきれなくなると倒伏するために、寿命は2000年ぐらいまでとなっています。これらの例のように、遺伝的寿命と環境との関係で、木はどこまでも大きくなれるものではありません。樹木は不思議な生き物で興味深いものです。

【目次】

巻頭言	樹木とはどういうものか	元森林総合研究所 森林環境部長 藤森 隆郎	1
特集 I	森のエピソード(3)―ヤブツバキ―	森林インストラクター 小菅 智彦	2
特集 II	森を楽しく ―名誉森林インストラクター故・山中寅文先生の思い出― (連載7)	一般社団法人日本森林インストラクター協会 常務理事・事務局長 寺嶋 嘉春	3
特集 III	子ども樹木博士認定活動の実施について(3)―奥利根水源の森での子ども樹木博士認定活動―	森林インストラクター 柳原 高文	4
事例報告 I	森林とのふれあいの集い (子ども樹木博士認定会) の実施報告	一般財団法人日本森林林業振興会旭川支部 稲垣こずえ	5
事例報告 II	フォレストパークあだたらの子ども樹木博士	公益財団法人ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団 利用促進担当 遠藤 史貴	6
子ども樹木博士質問コーナー	茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター	堀内 孝雄	7
A・ラ・カルト	土壌の肥沃度と指標植物		7
事務局だより	平成 27 年度の子どもの樹木博士認定活動の実施状況		8



森のエピソード (3) —ヤブツバキ—



森林インストラクター 小菅 智彦

これから早春にかけて花を開く代表的な樹木にヤブツバキがあります。北海道を除く日本列島から朝鮮半島南部、台湾にかけて海沿いを中心に分布しています。そもそもツバキという名称は「厚葉樹（あつばぎ）」または「艶葉樹（つやばぎ）」に由来すると言われ、どちらもツバキの葉の特徴を言い表しています。

常緑性のツバキはブナやカエデのように冬に葉を落としてしまうわけではありません。しかし分布地域は寒暖の差もあり、太平洋側では冬の乾燥も厳しいため、常緑樹にとってはやや暮らしにくい環境ということが言えます。そこで、防寒や乾燥対策として水分が蒸発しにくいように、葉を厚くしたり、葉の表面をクチクラと呼ばれる皮膜層でコーティングしたりする適応をしているのです。ヤブツバキをはじめ日本の常緑広葉樹の葉が落葉広葉樹に比べて厚く、つやつやとてかっているのはこのためで、その印象から常緑樹林は照葉樹林とも呼ばれています。

そして、艶やかで厚みのある緑の葉に映えるように大きな赤い（時に白い）花を咲かせることから、ツバキは染料や椿油を採るという実用面以外にも観賞用として人々に愛されるようになりました。古くは室町時代のツバキが今も京都の竜安寺に残り、江戸時代には2代将軍の徳川秀忠がツバキを好んだことから園芸椿が武家にも町人にも広がっていったと言われています。

一方、ヤブツバキと同様、初冬にかけて花が咲く樹にサザンカがあります。花の色や形も一見同じように見えますが、見分けの主なポイントとしては以下の点が挙げられます。

- ①ヤブツバキの花は完全に平開しないが、サザンカは平開する。
- ②ヤブツバキの雄しべの花糸は茶筌状に下半分が合着するが、サザンカはくっつかない。
- ③ヤブツバキの花弁は雄しべと一緒に丸ごと落ちるが、サザンカは花弁がばらばらに散る。
- ④ヤブツバキの子房は無毛で光沢があるが、サザンカ

の子房には毛が密生する。

ところで、このツバキですが、日本海側の豪雪地帯では、枝が細くしなやかで、雪の重みに耐え、雪の下に埋もれることで枝折れや寒さから身を守る適応をしたものが現れます。これはヤブツバキの変種でユキツバキ（雪椿）と呼ばれています。そして雪解けの始まりとともに、倒れた枝が次第に起き上がり、花を咲かせます。雪のイメージから花の色は白を連想しがちですが、ヤブツバキ同様、赤い花をつけます。花の構造はサザンカのように花弁が広く開きますが、花は丸ごと落ちてしまいます。ヤブツバキとユキツバキの分布が重なる地域では、両者の中間的な性質を持つユキバタツバキ（雪端椿）が現れます。

また、ユキツバキと同じように冬を連想させるネーミングに、庭などによく植えられているカンツバキ（寒椿）があります。こちらはツバキとサザンカを交配させた八重咲き中心の園芸種群ですが、花弁が平開し、ばらばらに散るなど花の特徴がサザンカに似るため、サザンカの園芸品種の一系統として整理されています。

逆に夏になると白い花を咲かせるツバキは落葉性のナツツバキ（夏椿）。別名シャラノキ（沙羅の木）として、小ぶりのヒメシャラ（姫沙羅）とともに庭木として愛されています。ツバキの仲間は日本人にとって四季を通じてとても親しみの深い樹木なのです。



ヤブツバキ（香川県小豆島）

特集Ⅱ

森を楽しく

—名誉森林インストラクター 故・山中寅文先生の思い出—
(連載 7)

一般社団法人日本森林インストラクター協会 常務理事・事務局長 寺嶋 嘉春

平成 4 年に名誉森林インストラクターの称号を付与された故・山中寅文氏から数多くのことを学びました。山中寅文氏と森を歩いた時の多くの楽しい思い出は、筆者にとって、今でも「森を楽しく」感じる源となっています。

山中寅文氏が語った、多くの樹木談義を思い出しますが、特に毒の植物を伝えることを大切にされていました。食べられる植物を語ると多くの人々が興味を示しますが、その時、同時に毒の植物のことを話題にすることは重要であり必要なことだと思います。

自然や森林と親しむ活動には、必ず予期せぬ危険が潜んでいます。しかし、子どもたちだけでなく多くの大人たちも、自然とふれあい親しむことは、かけがいのない不可欠なことです。災害の多い日本で自分の身を自から守り、また、持続可能な社会を構築していくうえでも、森林体験は重要です。今回は、毒の植物をどう語るか、手元のメモをもとに、山中寅文先生の口調をまねて、ご紹介してみます。

さて、今日は「食べられない植物」を覚えていただくのもいいのではなかろうかと思えます。

春に山に行きますと、林縁にニンジンみたいな葉っぱの植物が生えております。あれは、キケマンやムラサキケマンですが、食べてはいけません。

一番恐ろしいものを 3 つ申し上げますから覚えておいてください。

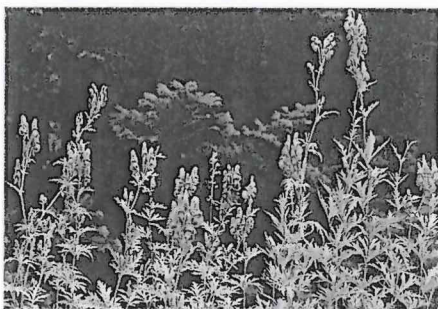
まず、トリカブト。これを食べたらイチコロです。小さいときは食べられるニリンソウによく似ていて一緒に生えていることもあります。大きく違うところは茎がどんどん伸びてきます。昔、アイヌの人々は、こ

れを矢の先に塗って獣を獲ったんです。ヤマトリカブトは、関東地方には多いんです。よく注意したほうがいいですね。

次は、ドクウツギ。林道の脇など、意外に身近にみられるものです。夏になると実がナンテンみたいに赤くなって、最後に黒くなります。茎は四角で葉っぱが対生に出てきます。一見「食べてみたいなあ」という感じ。子供がつい口に入れるような色です。しかし、これは全株が大変な毒ですから、箸に使ってなめてもいけないぐらい。もちろん食べたらイチコロです。見かけたら刈り取る習慣がありました。鳥が実を食べて増やすので、油断すると増えてきます。ちょっと陽当たりが良くて荒れたところにはこのドクウツギがうんと増えてきます。

最後に、ドクゼリ。今日、ここへ来る途中でセリがたくさんありました。あのセリは、茎の下からギザギザの葉っぱが出てくるんですが、よく見ると白い根っこが横に這っているだけです。セリは食べてもよろしい。ドクゼリは、まず、葉の茎の下の根っこがラッキョウとかノビルみたいに丸くなります。私が見たものではかなり大きなラッキョウみたいになっていました。小さい時には、セリと非常によく似ていますが、これはちょっと変だなと思ったら引っこ抜いてみたらよろしい。根っこがラッキョウとかノビルみたいに丸くなっていたらドクゼリです。

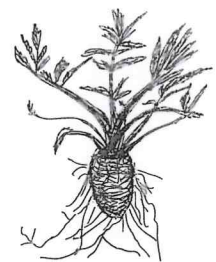
以上の 3 つの植物は、日本三大毒植物といわれています。この 3 つを食べるといかな私も責任を持ちませんが。あとは、ちょっとぐらい食べても死にはしません。食べられる植物より、毒のある植物をよく知っておくことの方がが必要です。(次号に続く)



ヤマトリカブト



ドクウツギ



ドクゼリ



子ども樹木博士認定活動の実施について(3) — 奥利根水源の森での子ども樹木博士認定活動 —



森林インストラクター 柳原 高文

2015年8月に、群馬県奥利根水源の森で子ども樹木博士認定活動を実施してきました。参加者は小学3年生から6年生、総勢32名でした。この日のプログラムの流れは、水源の森の散策→水生昆虫の観察→子ども樹木博士認定活動という森三昧です。

午前の散策で、ブナの森の気持ちよさ、ブナの木の幹の手触り、涼しい森の風にゆれるブナの葉の美しさを味わい、ブナだけではない植物の多様性に気付きました。水生昆虫の観察会では溪流の水の冷たさ、小さな流れなのに谷川には、たくさんの種類の生き物が暮らしている事を知りました。そして、昼食中に現れた大空を滑空するタカ。このような大自然にどっぷりと浸ったあとの樹木の解説は、子どもたちの自然への気付きが深いだけにスムーズに進んでいきました。

認定樹木は、ハウチワカエデ・ウリハダカエデ・ツルアジサイ・クロモジ・ウコギ・ウワミズザクラ・ムシカリ・ミズキ・ナナカマド、そしてブナの10本です。2種類のカエデの説明では、普段目にしているイロハカエデとは違う葉の形だが、カエデ科の樹木は葉や枝が対生になっていることから区別すること、種子がプロペラのような形をしていて風に乗って遠くに飛ばされることなどを知らせました。ウワミズザクラ、ミズキ、ナナカマド、ムシカリはそれぞれ実を付けていたことから、実を実らせることで鳥に食べさせ種子を運ぶことやその形状の違いなどを知らせました。

観察は五感で行うことが大切です。クロモジの香りを嗅がせると「あ〜良い香り」「すし屋のガリの臭いだ！」など評価はまちまちでしたが、植物の持つ香りについて関心が生まれたようです。

そして、ブナの説明です。午前の観察会で、子どもたちはブナとはすっかりお友だちになっています。しかし、葉の細かい形状は見えていません。波打つ鋸歯や側脈のつき方、葉の堅さなどを知りました。そして、「緑のダム」とはどのようなものなのか、観察会で踏みしめた地面を思い出させながら話を進めていきます。「ブナの森に降った雨はいきなり地面から川に流れ出ません。葉から枝・幹を伝わりゆっくりと地面にしみ込み地下水として貯められ、やがてわき水として川に流れ出ていきます。ですから、ブナの森では大雨が降っても川の水は濁りませんし増水もあまりしないのです。」昨日大雨が降ったことから、この説明を聞いた子どもたちは納得していきます。

試験の前は復習タイム、話を聞いてメモを見ながら葉や枝の形状、説明などを思い出していきます。

試験方法は番号の樹木の名前を紙に書き込んでいきます。結果、10本全問正解者が6名(18.8%)7~9本正解者が12名(37.5%)とおおむね樹木の名前を覚える事ができました。子ども樹木博士認定活動は樹木とお友だちになることが目的です。どうやら、それは果たせたようです。



事例 報告 I

森林とのふれあいの集い

(子ども樹木博士認定会) の実施報告

一般財団法人日本森林林業振興会旭川支部 稲垣 こずえ

9月6日、秋晴れの日曜日に「子ども樹木博士認定会」を実施しました。実施機関の一つである『「木の町あさひかわ」木育を進める会』は、旭川大学短期大学の森重教授を会長とし、北海道森林管理局（上川中部署等）、北海道上川総合振興局（南部森林室等）、旭川市（子育て支援部等）のほか、旭川地方森林整備事業協同組合、日本森林林業振興会旭川支部をメンバーとして、子どもたちが木に親しめる取組を進めていますが、樹木博士の認定会を実施したのは初めてです。

また、今回のイベントを国有林と道有林の連携事業の一環としても進めたこともあり、上川中部森林管理署と上川総合振興局南部森林室が連携・協力し合い、プチ林業体験や森での遊び体験の時間を設けるなど、全体を通して大変充実したプログラムとなりました。

参加者の募集では、少し苦労した面もありますが、小学生7名、大人4名の参加がありました。同時に、旭川市内の保育所の保育士や幼稚園の先生、旭川農業高等学校森林科学科へも募集を行い、保育士等3名、高校生2名の参加がありました。

当日は、①低学年の子どもたちと保護者、②高学年の子どもたちと保護者、③保育士等と高校生の3組に分かれ、旭川市神楽市民交流センターの敷地内をフィールドに「樹木ツアー」を行いました。この市民交流センターは、以前は旭川営林支局庁舎として使用されていたもので、敷地内には50種類以上の樹木・

花木があります。このため、コンパクトなエリア内で効率よく、安全に樹木を巡ることができました。また、日々秋らしさのます旭川では、実がつき始めた木も多く、葉の特徴や名前の由来のほか、羽のつく種子を飛ばせて見せたり、実の特徴などの説明も交えながら進めることができました。参加者の皆さんは、真剣に講師の話の聴き、問いかけに応え、葉を触ったりしながら、大事なポイントを樹木ノートにメモしていました。

その後、会議室で実施した「認定テスト」は、小学生だけではなく、保護者や保育士さん、高校生にも、力試しとして参加していただきました。さっさと終わらせて出てくる大人もいれば、最後まで粘る子も…。採点の結果は、全15問正解者が子ども2名、大人5名と奮闘し、全体としても大変成績のよい結果となりました。

認定テストの後は、のこぎりを使った丸太切り体験、樹高20m、胸高直径64cmのメタセコイヤの測樹体験のほか、種子飛ばしキットを使って遊ぶ時間を設け、子供も大人も一緒に思いっきり体を動かして木とのふれあいを楽しみました。

最後に、認定証を一人一人手渡し、子どもたちは、木製コースターや竹とんぼなどのお土産も受け取り、笑顔での閉会となりました。今後も、関係機関と連携しながら、旭川の皆さんに森林・林業に興味をもっていただく機会を提供していきたいと思ひます。



樹木ツアーの様子



樹木博士認定試験の様子

事例 報告Ⅱ

フォレストパークあだたらの 子ども樹木博士



公益財団法人ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団 利用促進担当 遠藤 史貴

あいにくの雨模様の中、福島県にあるフォレストパークあだたらで第一回目となる子ども樹木博士が開催されました。雨のため、当初予定していた20種類の樹木を全て観察することはできず、予定を変更して、観察できない樹木は標本を使いながら屋内で解説することにしました。本物とはいえ標本での解説は、参加者の反応が悪くなるのではと予想していましたが、予想に反して参加者は、葉を触ったり、匂いを嗅いだり、また質問をしたりと、とても興味深く観察してくれました。

マツの葉相撲の体験から「アカマツ」の葉が二枚一組になっていることを知ったり、いい香りのする「サンショウ」がミカンの仲間であることを知ったり、握りこぶしが名前の由来となった「コブシ」が、こぶしから赤くて小さな実が糸のようなものでぶらさがることを見たりして、五感を使った観察で名前を憶えていただくことができました。

今回の実施会場であるふくしま県民の森フォレストパークあだたらは、福島県の安達太良山の中腹にあります。90ヘクタールの広大な敷地の中に、森林学習のための施設やオートキャンプ場があり、毎年県内外から多くの利用者が訪れる施設です。この施設を管理・運営しているのが、公益財団法人ふくしまフォレスト・エコ・ライフ財団です。ふくしま県民の森をは

じめとして広く県内において、県民が森林の中で自然との共生を学び、体験し、様々な形で森林とふれあうライフ・スタイルを創出するフォレスト・エコ・ライフの推進、実践を図ることを目的としています。

今回子ども樹木博士を実施するにあたりフォレストパークらしさを出すため、地域の暮らしの中で人との係わりの深い木（炭材に使われてきたコナラや、養蚕に使われてきたクワ等）を選んだり、名前の伝え方にも気を付けました。昔から利用されてきた樹木は、「スギ（直木）」や「ブナ（樺）」のように人に利用される過程で名前が付けられたり、「クサギ」のように臭いで名前を付けられたり、地域独自の地方名（ナツハゼを「ヤマオトコ」）で呼ばれたり、人との係わりの中で名前が付けられることが多いような気がします。正しい名前は後から図鑑で覚えられますが、匂いや感触、人に利用されてきた歴史などの特徴は後から知ることは難しいので、むしろそういった感覚や情報を伝えることを重要視しました。

雨天で当初の予定とは異なる進め方で実施しましたが、結果的には、参加者が積極的に樹木の特徴を覚えてくれたため、11名の参加者の内、お子さんも含め6名が初段に認定されました。今後もこのような五感を使った直接体験の機会を増やしていきたいと思います。



子ども樹木博士質問コーナー(41)

茨城県植物園緑のインタープリター・森林インストラクター 堀内 孝雄



Q 冬になると、茎の下部に見事な霜柱を付けると言う植物はどのような植物ですか、どうしてそのような不思議なことが起こるのですか。

A それは、シソ科の多年草のシモバシラという植物です。冬に見事な霜柱を付けることから、和名がつけられています。シモバシラは、冬には、地上部が枯れてしましますが、根は、いつまでも生きていて、地中の水分を吸収し、茎の導管を水が上昇し続けます。こうした状況で、冬の氷点下の温度に冷却されて、凍結して霜柱を形成します。これが、霜柱を造るメカニズムです。この現象は、根が枯れてしまうまで続き例年 12 月から 1 月頃まで見られますが、真冬の 1 月下旬以降は見られなくなります。

シモバシラの花は、9～10 月頃に枝先に総状花序を出して白い花を咲かせます。日本固有の植物ですが、あまり見掛けることがないので、植物園などで見ると

いいでしょう。なお、シモバシラのように冬に枯れた茎に霜柱を付けるものに、ナギナタコウジュ、テンニンソウなど多くのシソ科植物があります。キク科のカシワバハグマ、アズマヤマアザミ、シロヨメナなどにも同じ現象が見られることが知られています。



庭のシモバシラに形成された見事な霜柱
(ひたちなか市 2012.12.11)

● ● ア・ラ・カルト ● ●

土壌の肥沃度と指標植物

我が国の代表的な造林樹種はスギ、ヒノキ、カラマツ、クロマツ、アカマツ、トドマツ、エゾマツです。トドマツ、カラマツ、エゾマツは北海道に見られ、スギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツは本州、四国、九州の丘陵、山岳地を中心に植えられ、古くから尾根マツ、沢スギ、中ヒノキと植栽適地が山のことわざになっています。クロマツは西南暖地の海岸地帯に多く、まれに群馬県のように内陸でも植栽されていました。このような造林樹種をどこに植えたら期待するような生育ができるか、ここに本来の指標植物の考えが役に立つのです。造林樹種の生育状態を 40 年生時の樹高で表し、そこに生えている林床の植物にも注目して見ると、肥沃な場所ではスギの樹高が 25 m 以上になるのに、痩せた土地では 10 m 以下になっています。また、その林床に生えている植物と肥沃度との関係は、おおよそ次のようにまとめられます。

(1) 肥沃な土地 (湿性土壌)

(草本) ミツバ、キツリフネ、ツリフネソウ、フユイチゴ、ウワバミソウ、ムカゴイラクサ、

ドクダミ、フタリシズカ、カツモウイノデ、ミゾシダ

(樹木) アオキ、ハナイカダ、コクサギ、ヤマアジサイ、ミツバウツギ

(2) 中庸な土地

(草本) トリアシショウマ、ベニシダ、コバノカナワラビ、ウラジロ

(樹木) イスノキ、マルバマンサク、クロモジ、アブラチャン、ムラサキシキブ、ヤブムラサキ、ヒメモチ、シキミ

(3) 痩せた土地 (乾性土壌)

(草本) ヒカゲノカズラ、オオイワカガミ、タガネソウ、シシガシラ、コシダ、キッコウハグマ

(樹木) アカシデ、アカガシ、コナラ、ヤマハギ、アオハダ、ソヨゴ、ヤマツツジ、ミツバツツジ類、ホツツジ、シャクナゲ類、ネジキ、シャシャンボ、オトコヨウゾメ、コウヤボウキ

これらの指標植物は主に暖温帯林のもので、冷温帯、多雪地帯ではそれぞれ生育する植物が少しずつ異なります。あなたの住んでいる地域の指標植物を観察して

みてください。また、乾性土壌と湿性土壌の移行帯にあたる中庸地では、乾性、湿性地のそれぞれの植物が混じり合う傾向があります。

(森林インストラクター養成講習テキスト選集：森林の観察（谷本丈夫先生）から）

● ● 事務局だより ● ●

◆平成 27 年度の子ども樹木博士認定活動の実施状況（平成 27 年 10 月までにご報告をいただいたもの）

実施日	実施団体等	都道府県	募集人員	参加人員	参加者
5. 3	21 世紀の森と広場「子ども樹木」認定事業実行委員会	千葉県	30	22	小学生親子
5. 9 5.10	(一財)日本森林林業振興会	東京都	32	32	小学生親子
5.25	桜スクール（柳原高文氏）	栃木県	50	35	小学生
6.17	白鷗大学（柳原高文氏）	栃木県	132	125	大学生
6.18	NPO 法人森林遊びサポートセンター	北海道	30	28	小学 5 年生
6.27	わくわく子ども教室	岐阜県	20	6	小学生
6.27	パウロの森くらぶ	東京都	30	13	親子
7. 4	盛岡森林管理署	岩手県	30	21	小学生
7. 9	オホーツク森の案内友の会	北海道	14	14	小学生
7.13	オホーツク森の案内友の会	北海道	37	37	小学生
7.20	山梨県緑化推進機構	山梨県	15	13	小学生
7.25	山梨県緑化推進機構	山梨県	15	14	小学生
7.25	(国研) 森林総合研究所	茨城県	60	15	小学生
7.26	埼玉県所沢おおぞら特別支援学校	埼玉県	20	1	小学生
7.26	馬見自然塾	奈良県	20	16	小学生
8. 2	森林インストラクターしずおか	静岡県	25	30	子ども・大人
8. 9	三重県上野森林公園	三重県	12	12	子ども
8.18	真庭森林組合	岡山県	23	23	子ども
8.18	フェリックス練馬教室・ひよし塾（柳原高文氏）	東京都	32	32	小学生
8.22	たかつき環境市民会議 里山グループ	大阪府	30	25	子ども・大人
8.23	ふくしま県民の森フォレストパークあだたら	福島県	30	11	親子
9. 6	「木の町あさひかわ」木育を進める会	北海道	20	16	小学生・保護者等
10. 4	美浜公園緑地事務所	千葉県	50	12	小学生
10.17	愛鷹広域公園管理事務所 (株)日産クリエイティブサービス	静岡県	20	18	小学生

◆実施結果のご報告のお願い

平成 27 年度（平成 27 年 4 月～28 年 3 月）の子ども樹木博士認定活動の実施結果につきまして、まだご報告をいただいているものがないものがございましたら、お手数をおかけしますが、ご報告いただければ幸いです。報告用紙はホームページから Word の用紙をダウンロードできます。また、報告用紙がない場合は、①実施団体名、②実施年月日、③募集人員、④参加人員、⑤対象者（小学生、親子等）、⑥実施場所等を記載したメモを FAX 又はメールで子ども樹木博士認定活動推進協議会事務局までお送り願います。

子ども樹木博士ニュース

2015 年 12 月 1 日 No.61

子ども樹木博士認定活動推進協議会

〒112-0004 東京都文京区後楽 1-7-12 林友ビル 6 階

一般社団法人全国森林レクリエーション協会内

TEL : 03-5840-7471 FAX : 03-5840-7472

E-mail : kodomohakase@shinrinreku.jp

URL : <http://www.shinrinreku.jp/kyokai/kodomokyouyou.html>

<http://www.shinrinreku.jp/kodomo-n/main.html>